

テイルの反復解釈について

上原 由美子

The Repetitive Interpretations of *-teiru*

Yumiko Uehara

The purpose of this paper is to explain the mechanism of the repetitive interpretations of Japanese aspectual form *-teiru* within the framework of conceptual semantics. Assuming that the function of repetitive *-teiru* is to transform a 1-dimensional entity into a 0-dimensional one as the functions of other *-teiru* such as progressive(See Iwamoto [2001]) and resultative, I will demonstrate how the repetitive interpretations are yielded by the principles of conceptual computation on the conceptual structures that incorporate the atomic aspectual features, rules of construal and structure preserving binding proposed by Jackendoff (1991,1996). Dividing the repetitive interpretations of *-teiru* into two types ("single period repetition," "plural period repetition"), I will suggest that the former interpretation is yielded by the aid of the rules of construal when neither progressive nor resultative interpretation is possible, and that the latter is yielded by lexical elements which suggest plural events such as "*mainichi*(everyday)" and "*yoku*(often)."

キーワード：*テイル、*反復、*概念構造、*0次元化、*解釈規則

0. はじめに

アスペクトを表す形式の一つである「～テイル」(以下、テイル)は様々な意味を表す。テイルの意味の分類や呼び方については、研究者によって若干違いがあるが、概ね次のようなものがあるとされている。

言語科学研究第9号（2003年）

- (1) a. 太郎が新聞を読んでいる（進行）
 b. 窓ガラスが割れている（結果）
 c. その男は、先週この店に立ち寄っている（経験・パーフェクト）
 d. 太郎は毎朝ジョギングをしている（反復）

本稿では、このうち(1 d)「反復」を対象として概念意味論の枠組みにおいて分析し、テイルが「反復」の解釈を与える条件を明らかにするとともに、「反復」を表すテイルが「進行」や「結果」を表すテイルと同一の概念であると考えることによって、テイルの「反復」の解釈のしくみを統一的に説明できることを示す。分析にあたっては、Jackendoff (1996)において提示された「構造保持束縛理論」や、それに基づいて岩本(2001)で提案された、進行相を表す概念関数などを用いる。

考察対象については以下のように規定する。通常、テイルで「反復」を表す文は、(1 d)「太郎は毎朝ジョギングをしている」のように、複数の期間にわたって同じ事象が習慣的に起きることを表す場合が多いが、テイルには「ライトが光っている」（「点滅している」の意味）や「京子が太鼓をたたいている」のように、一つの期間に同じ事象が繰り返し起きることを表す場合もある。この、「ライトが光っている」や「京子が太鼓をたたいている」などについては、通常のテイルの分類においては「進行」に含まれることが多いが、本稿では、これらの文も「反復」を表す文として考察対象に含める。そして、「太郎は毎朝ジョギングをしている」など、複数の期間にわたって事象が習慣的に起きることを表す文を「複数期間反復」と呼び、一方、「ライトが光っている」「京子が太鼓をたたいている」など、一つの期間に事象が繰り返し起きることを表す文を「単一期間反復」と呼ぶことにする。

以下、第1節では「単一期間反復」と「複数期間反復」の特徴を簡潔に述べ、第2節ではJackendoff (1996)による構造保持束縛理論と岩本(2001)による進行相の概念構造を概観し、第3節ではテイルの解釈と事象のタイプとの関係を提示する。第4節と第5節で、「単一期間反復」と「複数期間反復」の概念構造をそれぞれ提示し、第6節でまとめを述べる。

テイルの反復解釈について

1. 「単一期間反復」と「複数期間反復」

(2 a~c) と (3 a~c) は、それぞれ「単一期間反復」と「複数期間反復」の例である。

(2) 「単一期間反復」

- a. ライトが光っている
- b. 京子が太鼓をたたいている
- c. 田中さんが庭のありを殺している(cは金水2000:32)
(複数のありを一匹ずつ殺す、と解釈するとき)

(3) 「複数期間反復」

- a. 太郎は毎朝ジョギングをしている
- b. 松本さんは毎日庭を掃除している
- c. (路上の毒物を食べて)、よくペットが死んでいる

「単一期間反復」について見ると、(2 a~c)に見られるように、複数回であることを明示する語彙的成分(「毎日」など)がなくても「反復」の解釈が可能であるが、どのような文もこの解釈が与えられるというわけではなく、例えば(4 a~d)の文は通常の間脈では「反復」ではなく、「進行」や「結果」の解釈が優勢となる。

- (4) a. 京子はジュースを飲んでいる (進行)
- b. 順子は本を読んでいる (進行)
- c. パン屋の看板が倒れている (結果)
- d. 台所の窓が開いている (結果)

一方、「複数期間反復」については、「毎日」「時々」「よく」など複数の期間にわたっていることを表す語彙的成分や、「最近」など期間を表す語彙的成分があれば、文のタイプによらず「複数期間反復」の解釈が可能である。言い換えれば、(5)に見られるように、「複数期間反復」の解釈が与えられるためには、どのようなタイプの文でも、間脈からの支持がない限り、基本的にこれらの複数

言語科学研究第9号（2003年）

期間を表す語彙的成分が必要である。これらの成分がない場合は「進行」や「結果」の解釈が優勢となる。¹

- (5) a. 太郎は（毎朝）ジョギングをしている=(3a)
 →「毎朝」があれば「複数期間反復」、なければ「進行」
 b. 松本さんは（毎日）庭を掃除している=(3b)
 →「毎日」があれば「複数期間反復」、なければ「進行」
 c. 路上の毒物を食べて、（よく）ペットが死んでいる=(3c)
 →「よく」があれば「複数期間反復」、なければ「結果」

以上のように、「単一期間反復」と「複数期間反復」では、その解釈を受ける文の条件が異なるため、便宜上分けて考察する。そして、「反復」の解釈全体のしくみを明らかにするとともに、「単一期間反復」については、どのような文においてこの解釈が可能なのか、また「複数期間反復」については、あらゆるタイプの文についてこの解釈が可能となる理由を明らかにする。

2. 理論的枠組み

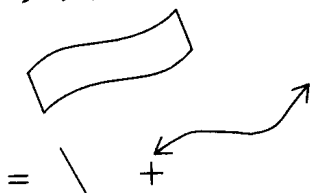
本節では、本稿で採用する理論的枠組みであるJackendoff (1996) による「構造保持束縛理論」と岩本(2001)による進行相を表す概念関数「CR (cross-section)」を概観する。

2. 1 Jackendoff (1996)

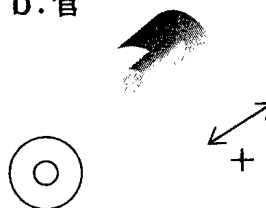
Jackendoff(1996)は、概念意味論をより説明力のあるものにするため、事象とそれを構成する要素（物体、時間、空間など）との相対的対応関係を明示する概念構造を提案した。これは、具体的な物体の定義法を事象の定義法に拡張したものである。例えば、(6)に見るように、2次元の物体であるリボン(6a)は、1次元の線を1次元の軸に投射したものと定義し、3次元の物体である管(6b)は、環形の2次元の断面を1次元の軸に投射したものと定義する方法である。つまり「断面」の形状が軸に沿って延びていくことによって、物体全体の形状が得られるという考え方である。

テイルの反復解釈について

(6) a. リボン



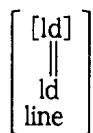
b. 管



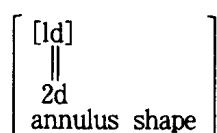
(bはJackendoff 1996 :319)

(6 a,b)の概念構造が(7 a,b)となる。(7 a,b)では、下部が「断面」(cross-section)を、縦の二重線が「投射」(projection)の軸を、上部が軸の素性を表す。つまり(7 a)「リボン」は、1次元 [1 d] (dはdimensionalityを表す)のlineが1次元の軸に投射されていることを表しており、(7 b)「管」は、2次元 [2 d] の環形 (annulus shape) である断面が1次元の軸に投射されていることを表している。

(7) a. リボン



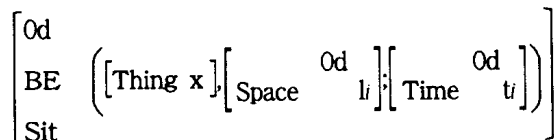
b. 管



(bは Jackendoff 1996 : 319)

物体の形を定義するこのような概念構造は、事象を表す概念構造に拡張される。例えば、ある時間軸に沿って対象が移動するという事象においては、時間軸上のどの点にも、対象が、ある場所に存在することを表す「断面」が存在すると考える。この「断面」を形式化したものが(8)である。(8)は、対象Xが時間 t_i (0次元)において場所 l_i (0次元)に存在するという「状態」(BE)を表す。一番左の「0 d」は、この事象全体が0次元 (つまり「状態」)であることを表す。また、Sit(uation)は、この概念構造のカテゴリーが「事象」であることを表す。

(8)



(Jackendoff 1996 : 321)

(7)の「リボン」や「管」に見られるように物体の概念構造では、「断面」は一本の軸にのみ投射するが、事象の場合は、「断面」は、「事象」「空間」「時間」という3本の軸に相同的に投射する。つまり、事象の開始点においては「事象」も「空間」も「時間」も開始点にあり、事象が進んだ分だけ「空間」「時間」も

言語科学研究第9号 (2003年)

相同的に進み、事象の終結点で「空間」「時間」も終結する。「事象」「空間」「時間」のこのような相同的關係は「構造保持束縛關係」(structure-preserving binding relation (sp-binding)) と呼ばれ、この表記法を用いて移動の事象を表すと(9)のようになる。

$$(9) \quad \left[\begin{array}{ccc} [Id]^\alpha & [Id]^\alpha & [Id]^\alpha \\ \parallel & \parallel & \parallel \\ Od & & \\ Sit^{BE}([Thing^X]; [Space^{Od}]; [Time^{Od}]) & & \end{array} \right] \begin{array}{l} [sp-bound axes] \\ [cross-section] \end{array} \quad (\text{Jackendoff 1996 : 322})$$

(9)は、0次元の断面 (cross-section) が、1次元の軸 (sp-bound axes) よって投射されていることを表す。3本の軸は、左から「事象」「空間」「時間」を、上付きのギリシャ文字 (α) は3本の軸の相同性を表す。

さらに、この概念構造には「事象」「空間」「時間」の有界性 (boundedness) が表示される。有界性の概念についても、物体の概念が事象に拡張されている。例えば、可算名詞の an apple のような物体は有界的であり、一方、物質名詞の water などは非有界的な物体であると特徴づけられる。そして、an apple のような物体の有界性を表す素性を [+b] (+bounded)、water のような物質の非有界性を表す素性を [-b] (-bounded) と表す。この物体の有界性の概念を空間の概念に拡張してみると以下のようなになる。(10a) のように to や into や over で表される空間行路は限界点を持つことから有界的であり、(10a) のように along や toward で表される空間行路は限界点を持たないので非有界的である。そして、(10a)(10b) それぞれについて、事象全体の有界性を、in/for an hour という句でテストしてみると、(10a) は、in an hour と共起することから有界的であり、一方(10b) は for an hour と共起することから非有界的であることがわかる。すなわち、行路の有界性と事象の有界性は一致する。

- (10) a. The cart rolled to NY/into the house/over the bridge
(in/*for an hour). . . . 空間も事象も有界的
- b. The cart rolled along the road/toward the house (for/*in an hour). . . . 空間も事象も非有界的 (Jackendoff 1996 : 325より)

テイルの反復解釈について

このような行路と事象の相同性を組み込んだ概念構造が(11a, b)である。(11a)が有界的 [+b] 事象を、(11b)が非有界的 [-b] 事象を表す。(11a)は事象も行路も時間も [+b] であり、(11b)は事象も行路も時間も [-b] である。

(11)

a. End-bounded event, path, and time. b. Nonbounded event, path, and time.

$$\left[\begin{array}{ccc} \begin{array}{c} [\text{Id}]^\alpha \\ [+b] \end{array} & \begin{array}{c} [\text{Id}]^\alpha \\ [+b] \end{array} & \begin{array}{c} [\text{Id}]^\alpha \\ [+b] \end{array} \\ \parallel & \parallel & \parallel \\ \text{Od} & & \\ \text{Sit}^{\text{BE}}([\text{Thing}^{\text{X}}], [\text{Space}^{\text{Od}}], [\text{Time}^{\text{Od}}]) & & \end{array} \right] \quad \left[\begin{array}{ccc} \begin{array}{c} [\text{Id}]^\alpha \\ [-b] \end{array} & \begin{array}{c} [\text{Id}]^\alpha \\ [-b] \end{array} & \begin{array}{c} [\text{Id}]^\alpha \\ [-b] \end{array} \\ \parallel & \parallel & \parallel \\ \text{Od} & & \\ \text{Sit}^{\text{BE}}([\text{Thing}^{\text{X}}], [\text{Space}^{\text{Od}}], [\text{Time}^{\text{Od}}]) & & \end{array} \right]$$

(Jackendoff 1996 : 324)

以上のように、「事象」「行路」「時間」の相同性が形式的に表される。

次に、Jackendoff (1996)が、提示したいいくつかの概念関数(conceptual function)のうち、「反復」事象に関連のあるPL(plural=複数)を見ておく。Jackendoff (1996)は、「複数性」の概念についても、物体の複数性を事象の複数性すなわち「反復」に拡張している。(12a)は単数のa dogを表し、(12b)は、(12a)にPLを適用した結果を表す。なお、概念構造の中の[±i]は「内部構造」(internal structure)素性を意味し、[-i]は内部構造を持たないこと、つまり単数の実体から構成されていることを表し、[+i]は内部構造を持つこと、つまり複数の同一の実体から構成されていることを表す。またPLは、有界実体を非有界実体に変換する機能も持ち、(12a)の[+b]は、PLによって[-b]に変換される(12b)。なお、Mat(erial)はこの概念構造のカテゴリーが「物体」であることを表している。

$$(12) \text{ a. } \begin{bmatrix} +b, -i \\ \text{Mat}^{\text{DOG}} \end{bmatrix} = \text{a dog} \quad \text{b. } \begin{bmatrix} -b, +i \\ \text{Mat}^{\text{PL}} \left(\begin{bmatrix} +b, -i \\ \text{Mat}^{\text{DOG}} \end{bmatrix} \right) \end{bmatrix} = \text{dogs}$$

(Jackendoff 1991 : 21)

この「複数性」の概念を事象に拡張したのが(13)である。下部の「断面」の部分が、Bill ate an appleという一回の事象を表しており、縦の二重線により、事象と対象(APPLE)と時間にそれぞれPL関数(plural=複数)が適用されて、事象と対象と時間が「複数」になることを表している。つまり、(13)の概念構造全体ではBill ate applesを表す。

言語科学研究第9号（2003年）

$$(13) \left[\begin{array}{ccc} [\text{PLUR}]^{\alpha} & [\text{PLUR}]^{\alpha} & [\text{PLUR}]^{\alpha} \\ \parallel & \parallel & \parallel \\ \text{Sit} \text{ EAT} & (\text{BILL}, [\text{APPLE}]); & [\text{TimeOd}] \end{array} \right] \quad (\text{Jackendoff 1996 : 338})$$

Bill ate apples という文において、形態的に複数性が明示されているのは対象の apples だけであるが、「構造保持束縛」により、事象を投射する軸、および時間を投射する軸も構造保持束縛され、複数化される。

以上見てきたように、有界性([±b])と内部構造 ([±i]) の二つの素性によって、物体および事象は、以下のように平行的に表される。

(14)

	物体	事象
[-b, -i] (非有界的・内部構造なし)	Water (substances)	The cart rolled toward the house .
[+b, -i] (有界的・内部構造なし)	An apple (individuals)	The cart rolled to NY. Bill ate an apple .
[-b, +i] (非有界的・内部構造あり)	Apples, cattle (aggregates)	Bill ate apples .
[+b, +i] (有界的・内部構造あり)	A committee (groups)	The light flashed until dawn .

(Jackendoff 1991 : 20, Jackendoff 1996 などに基づき作成)

以上、Jackendoff(1991, 1996)における構造保持束縛理論、および有界性の概念、概念関数などについて概観した。

2. 2 岩本 2001

次に、岩本(2001)による進行相の概念構造について概観する。本稿のテーマは、テイルの「反復」の解釈であるが、すでに述べたように、本稿では「進行」「結果」「反復」を表すテイルをすべて同一の概念と仮定するため、テイルの基本的な意味の一つである進行相の概念は重要なものとなる。岩本(2001)では、Jackendoff(1996)の構造保持束縛理論に基づいて、進行相の意味を表す概念関数CR(cross-section = 「断面」)が提示された。この概念関数は、2.1で見

テイルの反復解釈について

た構造保持束縛において縦の二重線が表していた「投射」(projection、つまりn次元の「断面」を軸上に投射してn+1次元の物体や事象に写像する関数)の逆関数とされている。すなわちn次元の物体や事象をn-1次元の「断面」に写像する関数(つまり「戻す」関数)に相当する。この概念構造を用いると、「魚が泳ぐ」と「魚が泳いでいる」は、それぞれ(15a)、(15b)と表される。(15a)では、「ある時間に、魚がある場所にいる」という状態を表す「断面」が、PR (project) 関数によって非有界的 [-b] な投射軸に投射されており、概念構造全体として「魚が泳ぐ」という1次元 [1d] の事象を表している。なお、PR(projection)は、Jackendoff(1996)の概念構造において縦の二重線だけで表されていたのと同じ関数であるが((7)(9)(11)参照)、岩本(2001)では、新しく提案された関数CRと区別するために、PR(projection)と明記されている。(15b)は、(15a)にテイルの概念である関数CRが適用されており、概念構造全体として「断面化」(0次元化)された概念を表している。

(15) a. 魚が泳ぐ

$$\left[\begin{array}{ccc} [\text{Id}, -b, -i]^\alpha & [\text{Id}, -b, -i]^\alpha & [\text{Id}, -b, -i]^\alpha \\ \text{PR} \parallel & \text{PR} \parallel & \text{PR} \parallel \\ \text{Od} & & \\ \text{Sit BE} ([\text{FISH}], [\text{Space}^{\text{Od}}]); [\text{Time}^{\text{Od}}] & & \end{array} \right]$$

b. 魚が泳いでいる

$$\left[\begin{array}{ccc} [\text{Od}]^\beta & [\text{Od}]^\beta & [\text{Od}]^\beta \\ \text{CR} \parallel & \text{CR} \parallel & \text{CR} \parallel \\ [\text{Id}, -b, -i]^\alpha & [\text{Id}, -b, -i]^\alpha & [\text{Id}, -b, -i]^\alpha \\ \text{PR} \parallel & \text{PR} \parallel & \text{PR} \parallel \\ \text{Od} & & \\ \text{Sit BE} ([\text{FISH}], [\text{Space}^{\text{Od}}]); [\text{Time}^{\text{Od}}] & & \end{array} \right] \left. \begin{array}{l} \text{テイル} \\ \text{魚が泳ぐ} \end{array} \right\}$$

(岩本2001: 45)

岩本(2001)では、この知見はテイルと二格後置詞句との共起から説明されている。²しかし、テイルが0次元化の働きを持つ関数であるということは、従来の国語学・日本語学の研究において、テイルは、「何かがある状態にあることを表す」、「状態相を表すアスペクト」(金田一1950(1976版p.39))、「運動動詞の中から一定の段階を取り出して、視点がその段階にあることを指し示す」(金水2000: 8)などと記述されていることとも合致するものである。³岩本(2001)が提示したCRは、これらの記述を形式化しているものと言える。

3. テイルの解釈と事象のタイプ

2.2では、「進行」を表すテイルの概念として、1次元を0次元に変換する関数であるCR (cross-section) について概観したが、本節では、「結果」や「反復」

テイルの反復解釈について

の相互作用によって、以下に見るように、必然的に、事象の展開の中でテイルによって表される状態が異なるものと考えられる。⁶以下で、事象のタイプごとに、概念構造とテイルの解釈の関係を見ていく。

まず、「働く」のような主体動作動詞で表される事象は、(11b)と同様な概念構造を持つ。なお、「働く」の場合、中央の軸は空間的な位置ではなく、身体的な動きという行路を進むと考え、Space Motionと表す（岩本 [2001:52]）。

(17) 太郎が働く。

$$\left[\begin{array}{ccc} [\text{Id}, -b]^\alpha & [\text{Id}, -b]^\alpha & [\text{Id}, -b]^\alpha \\ \text{PR} \parallel & \text{PR} \parallel & \text{PR} \parallel \\ \text{Od} & & \\ \text{Sit BE}([\text{TARO}], [\text{SpaceMotion}^{\text{Od}}]); & & [\text{Time}^{\text{Od}}] \end{array} \right]$$

「働く」などの動作動詞で表される事象は非有界的 [-b] であり、少しでも働けば「働いた」と言える。つまり、事象開始時点から事象は「投射」しており（つまり成立しており）、事象の展開の中でどの点においても「働く」という事象は成立している。先に述べたようにテイルは「投射」した事象に適用されるとすると、「働いている」の場合、事象の開始後（事象の展開途中）を表し、すなわち「進行」の解釈となる。概念構造に即して言うと、事象が非有界的 [-b] であれば、テイルは「進行」の解釈を与えられるということになる。

次に、「死ぬ」のような変化動詞を見る。

(18) 犬が死ぬ。

$$\left[\begin{array}{ccc} [\text{Id}, +b]^\alpha & [\text{Id}, +b]^\alpha & [\text{Id}, +b]^\alpha \\ [-\text{DEN}] & \text{BDBY}^+([\text{DEAD}]) & [-\text{DEN}] \\ \text{PR} \parallel & \text{PR} \parallel & \text{PR} \parallel \\ \text{Od} & & \\ \text{Sit BE}([\text{DOG}], [\text{Property}^{\text{Od}}]); & & [\text{Time}^{\text{Od}}] \end{array} \right]$$

「死ぬ」など、状態が変化する動詞が表す事象の概念構造では、中央の軸は、space(空間)のかわりに、property (属性) を表す (Jackendoff 1996:331)。(17)の動作動詞は、限界点がなく、軸は [-b] (-bounded) であったが、(18)の変化

言語科学研究第9号（2003年）

動詞は限界点を持ち（「死」によって限界づけられる）、軸は [+b] (+bounded) となる。BDBY⁺とは、“bounded by”を意味し（Jackendoff 1991:34）、中央の軸は「Identificationが、「DEAD」という状態によって限界づけられる」（「死んでいる」という状態に変化する）ことを表す。このような変化動詞は、限界点に至るまでは事象は成立しない。つまり、「死ぬ」が完了するまでは「死んだ」といえない。このように変化が非連続であることを [-DEN]（density稠密性）と表すことにする。⁷ [-DEN]（非連続）の事象においては、事象が完了して初めて「投射」することになる。日本語のテイルが、上述したように「投射」した事象のみに適用されるとすると、[-DEN]の変化動詞においては、0 d化関数であるテイル（CR）は、事象の途中を表さず、つまり「進行」の解釈とはならず、限界点に至って事象が成立した状態を表す。つまり「結果」の解釈となる。

次に、「押す」「たたく」など、対象が変化しない他動詞の概念構造について見る。これらの動詞の目的語は変化を被らないので、基本的には動作動詞と同じ概念構造を持つと考える。ただし、「押す」と「たたく」では、限界性において異なっており、「押す」などは非有界的 [-b]、「たたく」などは有界的 [+b] である。

(19) a. 太郎が車を押す

b. 京子が太鼓をたたく（1回）

$$\left[\begin{array}{ccc} [ld,-b]^{\alpha} & [ld,-b]^{\alpha} & [ld,-b]^{\alpha} \\ PR \parallel & PR \parallel & PR \parallel \\ Od & & \\ Sit_{BE}([TARO],[SpaceMotion^{Od}]); [Time^{Od}] \end{array} \right] \quad \left[\begin{array}{ccc} [ld,+b]^{\alpha} & [ld,+b]^{\alpha} & [ld,+b]^{\alpha} \\ [-DEN]^{\alpha} & [-DEN]^{\alpha} & [-DEN]^{\alpha} \\ PR \parallel & PR \parallel & PR \parallel \\ Od & & \\ Sit_{BE}([KYOKO],[SpaceMotion^{Od}]); [Time^{Od}] \end{array} \right]$$

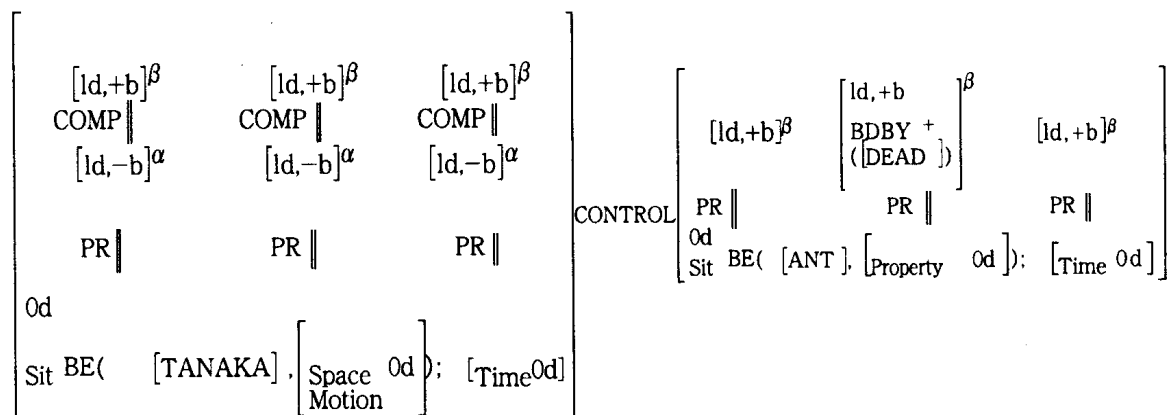
(19a)は(17)と同様に非有界的 [-b] 事象であり、テイル（「押している」）は「進行」の解釈となる。一方、(19b)は、有界的 [+b] であり、また事象が終わる以前には事象は「投射」（成立）していないため（たたき終わる前に「たたいた」とは言えない）、(18)「死ぬ」と同様にテイルは「進行」を表さない。しかし、(19b)は、(18)とは異なり、対象の変化によって限界づけられるものではないため、「結果」を表すこともない。つまり、(19b)「たたく」のような事象においては、「投射」している断面（事象が成立している「状態」）がどこにも存在せず、テイルによって0 d化することができないといえる。結論を先取りすると、この

テイルの反復解釈について

ように「進行」も「結果」も表さない(19b)の構造こそが、テイルが適用されたときに最終的に「単一期間反復」の解釈を与えることになる。詳細は第4節で考察する。

次に、「殺す」など、対象の変化を伴う他動詞（使役動詞）が表す事象を見る。このタイプの事象は、動作主の動作と、対象の変化という二つの概念から構成されていると考えられている（影山1996など）。ここでは、影山(1996)で用いられている、使役を表す概念であるCONTROLを使って、動作の概念構造（左）と変化の概念構造（右）を組み合わせて次のように表す。

(20) 田中さんがあり（一匹）を殺す



動作を表す左の概念構造において、その下半分は、動作動詞の概念構造(17)と同じである。その上に適用されているCOMPという関数は、5節で詳述するが、一言でいえば非有界的実体 [-b] を有界的実体 [+b] に変換する関数である。元来、動作は非有界的 [-b] であるが、このように変件事象と組み合わせさせて使役動詞となる場合、変化の終了とともにその動作も終了するため、その時点に限界点として有界化されていると考えられる。このような使役事象のテイルの文である「田中さんがありを殺している」は、「単一期間反復」の解釈（複数のありを次々と殺している）と「進行」の解釈（一匹のありを殺している）の両方が可能であるが、この仕組みについては4節で併せて考察する。

以上、第3節では、事象のタイプごとに、テイルの概念である関数CRを適用した際の解釈について見た。使役事象については次節で見るが、非限界的な動作動詞の表す事象(17)、(19a)、変化動詞の表す事象(18)、点的事象(19b)におけるテイルの解釈については、「テイルは1 dを0 dに変換する関数」であり、また

「投射した事象のみに適用する」という制約を有すると仮定することで説明できることがわかった。

4. 「単一期間反復」の概念構造

第4節と第5節では、「反復」を表すテイルの概念もまたCRであると仮定することにより、テイルの「反復」の解釈の仕組みが説明できることを明らかにする。まず第4節では、「反復」のうち、一つの期間に複数回の事象が生起する「単一期間反復」を考察する。第1節で見たように、「単一期間反復」については、この解釈ができる事象とできない事象があるが、この解釈ができる事象とはどのような事象であろうか。「単一期間反復」になる(2 a, b, c)のうち、まず(2 a, b)を見ると、これらの「光る」や「たたく」という事象は、第2節でみた概念構造の中での(19b)に相当する。ここでは、「光る」を例に見ていく。

(21) ライトが光る。(一回の事象)

$$\left[\begin{array}{ccc} \left[\begin{array}{c} \text{ld,+b} \\ \text{-DEN} \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} \text{ld,+b} \\ \text{-DEN} \end{array} \right]^\alpha & \left[\begin{array}{c} \text{ld,+b} \\ \text{-DEN} \end{array} \right]^\alpha \\ \text{PR} \parallel & \text{PR} \parallel & \text{PR} \parallel \\ \text{Od} & & \\ \text{Sit BE}(\text{[LIGHT]}, [\text{Property Od}]); & & [\text{Time}^{\text{Od}}] \end{array} \right]$$

「ライトがついて、消える」という事象の展開が終了しないと「光った」とは言えないので、「光る」は、事象の開始時点から事象が「投射」している事象ではない。このような事態は(18), (19b)で見たように「進行」の解釈は与えられない。また、「光る」は対象が、異なる状態に変化することによって限界づけられる事象でもない。「光る」は「ついて消える」という事象の展開を表しており、もとの状態に戻ってしまうので対象が変化する事象ではないのである。(19b)で見たように、このような事象は「結果」の解釈を与えられない。このように、テイルが「進行」も「結果」にも解釈されないということは、この文は解釈不能に陥る可能性があることを示唆する。Jackendoff (1991)では、ある文が解釈不能に陥ることを回避するために働く規則として「解釈規則」(rules of construal)

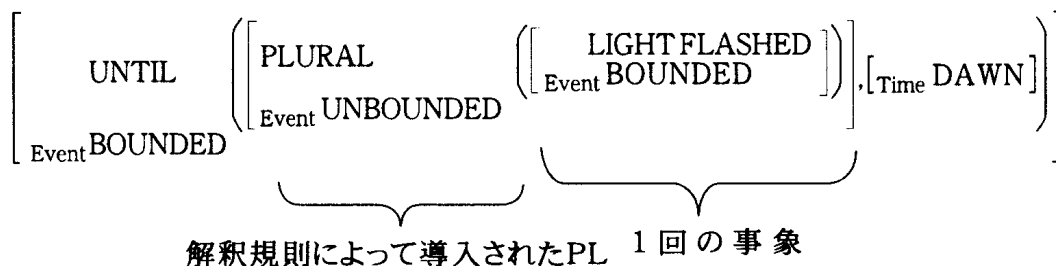
テイルの反復解釈について

が提案されている。「解釈規則」の例は次のようなものである。

(22) The light flashed until dawn. (Jackendoff 1991:15)

(22)は、複数回の事象であることを明示する成分 (“repetitively,” “many times” など) がないにも関わらず、「ライトが夜明けまで何度も光った」という意味になる。Jackendoff (1991)によれば、これは The light flashedという事象は有界的 [+b] 事象であるが、これを until dawnという、期間の限定を表す有界的 [+b] な句で限界づけようとするために素性の衝突がおこる。そこで、解釈不能になることを回避するため、解釈規則によって有界的事象を非有界的事象 [-b] に変換する関数の一つであるPL(Plural)関数が導入されるとしている。これを概念構造で表すと次のようになる。

(23)

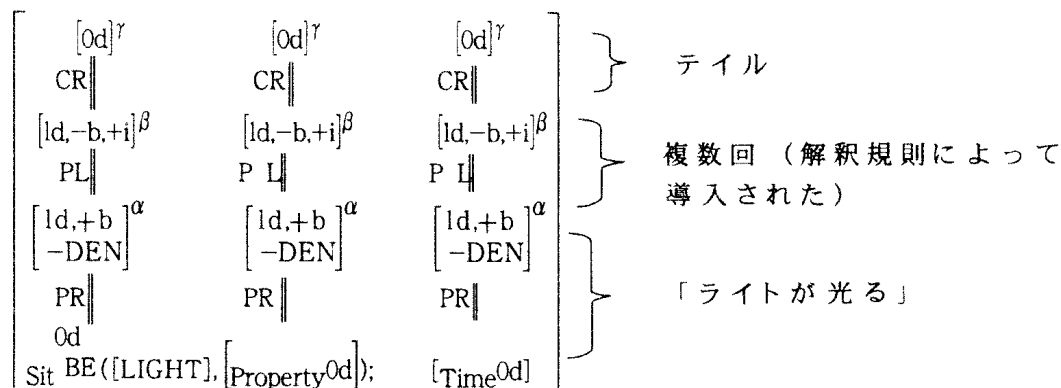


(Jackendoff 1991: 18)

以上が「解釈規則」の概要であるが、話をテイルの「反復」の解釈に戻すと、あるテイルの文が「進行」の解釈も「結果」の解釈も与えない場合に、文の解釈を可能にするために、解釈規則によって、非有界化関数（ここではPL (Plural)）が導入されると考えられる。PLは、(12) (a dogをdogsに変換する) で見たように、単数 [-i] を複数 [+i] に変換するとともに、有界 [+b] を非有界 [-b] に変換する関数であり、PLによって事象が非有界化されれば、「進行」の場合と同様にテイル (CR) を適用することができる。概念構造で表すと以下のようになる。

言語科学研究第9号（2003年）

(24) ライトが光っている（単一期間反復）



このようにして実現されたテイルの解釈が「単一期間反復」になる。反復を表すPLが解釈規則によって導入されたものであるという分析は、日本語学における先行研究において、テイルの基本的な意味は「進行」と「結果」であり、「反復」は二次的な解釈であるとしている見解とも一致する。すなわち、テイルが「進行」または「結果」と解釈される場合は、事象に直接CRが適用されるという点で一次的であり、「反復（「単一期間反復」）と解釈される場合は、解釈規則によってPLが導入された後にCRが適用されるという点で二次的であると言える。以上、テイルの解釈において、一義的に「単一期間反復」の解釈のみが可能な文を考慮した。

次に、「進行」と「単一期間反復」の両方の解釈が可能な文について考察する。(2c)の「田中さんが庭のありを殺している」は、「単一期間反復」の解釈の例として挙げたが、この文は「進行」の解釈、つまり一匹のありを殺している、という解釈も可能である。⁸このように、対象が変化する他動詞文（使役事象）のテイルの文は、対象の複数解釈が可能である場合においては、「進行」と「単一期間反復」の2通りの解釈が可能である。この2通りの解釈の仕組みは以下のようになる。まず、テイルのない「田中さんがあり（一匹）を殺す」の概念構造は、(20)である。この概念構造に、テイル(CR)を適用する場合、まず [+b (有界的), -DEN (非連続)] であることから、この段階では「進行」の解釈は得られない（最終的には「進行」の解釈が得られるが、これについては後述する）。

テイルの反復解釈について

また、現象からみた事実として「結果」も表さない（使役事象のテイルが「結果」を表さない理由については、いくつかの可能性はあるがここでは立ち入らない）。このように、使役事象の文にテイルを適用しようとする「進行」の解釈も「結果」の解釈も与えられないことから、文が解釈不能になるのを避けるために解釈規則が働くものと考えられる。その際、まず、(24)「ライトが光っている」と同様に、解釈規則によってPLを導入することにより事象を非有界化し、テイルの解釈を可能にする方法が可能である。これが「単一期間反復」の解釈であり、概念構造は(25)のようになる。(25)は(20)の概念構造にPL（解釈規則によって導入された関数）とCR（テイル）が適用されたものである。なお、この構造では対象である「あり」も複数匹の解釈となり、PLが適用される。

(25) 田中さんがありを殺している（「単一期間反復」）

$\begin{matrix} [Od]^{\gamma} & [Od]^{\gamma} & [Od]^{\gamma} \\ CR \parallel & CR \parallel & CR \parallel \\ [ld, -b, +i]^{\delta} & [ld, -b, +i]^{\delta} & [ld, -b, +i]^{\delta} \\ PL \parallel & PL \parallel & PL \parallel \\ [ld, +b]^{\beta} & [ld, +b]^{\beta} & [ld, +b]^{\beta} \\ COMP \parallel & COMP \parallel & COMP \parallel \\ [ld, -b]^{\alpha} & [ld, -b]^{\alpha} & [ld, -b]^{\alpha} \\ PR \parallel & PR \parallel & PR \parallel \\ Od \\ Sit BE([TANAKA], [Space Od]); [Time Od] \end{matrix}$	CONTROL	$\begin{matrix} [Od]^{\gamma} & [Od]^{\gamma} & [Od]^{\gamma} \\ CR \parallel & CR \parallel & CR \parallel \\ [ld, -b, +i]^{\delta} & [ld, -b, +i]^{\delta} & [ld, -b, +i]^{\delta} \\ PL \parallel & PL \parallel & PL \parallel \\ [ld, +b]^{\beta} & [ld, +b]^{\beta} & [ld, +b]^{\beta} \\ PR \parallel & PR \parallel & PR \parallel \\ Od \\ Sit BE([ANT], [Property Od]); [Time Od] \end{matrix}$
--	---------	---

次に、「田中さんがありを殺している」の二義的解釈のもう一方の解釈である「進行」について考察する。上述したように、(21)「ライトが光る」には直接にCRを適用することができなかつたため、解釈規則によってPLを導入して事象を非有界化してからCRを適用することで、(24)「ライトが光っている」の構造になり「単一期間反復」の解釈が与えられた。しかし、非有界化関数はPL以外にもあり、解釈規則によってPL以外の関数を導入して事象を非有界化する方法も可能である。

非有界化のためにここで採用するのはJackendoff(1991)で提示された関数の

言語科学研究第9号（2003年）

一つのGR(grinder)である。GRは、有界の実体を非有界の実体に変換する関数であり、Jackendoff (1991)では、例えばpigという有界の個体にGRを適用するとporkという非有界の物質に変換されるという例が挙げられている。⁹

$$(26) \text{ GR(grinder)の例} \quad \text{pork} = \left[\begin{array}{c} -b, -i \\ \text{MEAT} \\ \text{GR} \left(\left[\begin{array}{c} +b, -i \\ \text{PIG} \end{array} \right] \right) \end{array} \right] \quad (\text{Jackendoff 1991: 26})$$

(20) 「田中さんはあり（一匹）を殺す」に、解釈規則によってこのGRを導入して事象を非有界化してから、テイルのCRを適用した概念構造は以下ようになる。これは、一回の事象を非有界化してCRを適用したものであるから「進行」の解釈となる。

(27) 田中さんがあり（一匹）を殺している（進行）

$$\left[\begin{array}{ccc} \begin{array}{c} [\text{Od}]^\gamma \\ \text{CR} \parallel \\ [\text{Id}, -b]^\delta \\ \text{GR} \parallel \\ [\text{Id}, +b]^\beta \\ \text{COMP} \parallel \\ [\text{Id}, -b]^\alpha \\ \text{PR} \parallel \\ \text{Od} \end{array} & \begin{array}{c} [\text{Od}]^\gamma \\ \text{CR} \parallel \\ [\text{Id}, -b]^\delta \\ \text{GR} \parallel \\ [\text{Id}, +b]^\beta \\ \text{COMP} \parallel \\ [\text{Id}, -b]^\alpha \\ \text{PR} \parallel \\ \text{Od} \end{array} & \begin{array}{c} [\text{Od}]^\gamma \\ \text{CR} \parallel \\ [\text{Id}, -b]^\delta \\ \text{GR} \parallel \\ [\text{Id}, +b]^\beta \\ \text{COMP} \parallel \\ [\text{Id}, -b]^\alpha \\ \text{PR} \parallel \\ \text{Od} \end{array} \\ \text{Sit BE}([\text{TANAKA}], [\text{Space } \text{Od}]); [\text{Time} \text{Od}] & \text{CONTROL} & \begin{array}{ccc} \begin{array}{c} [\text{Od}]^\gamma \\ \text{CR} \parallel \\ [\text{Id}, -b]^\delta \\ \text{GR} \parallel \\ [\text{Id}, +b]^\beta \\ \text{PR} \parallel \\ \text{Od} \end{array} & \begin{array}{c} [\text{Od}]^\gamma \\ \text{CR} \parallel \\ [\text{Id}, -b]^\delta \\ \text{GR} \parallel \\ [\text{Id}, +b]^\beta \\ \text{BDBY } + \\ (\text{DEAD}) \\ \text{PR} \parallel \\ \text{Property } \text{Od} \end{array} & \begin{array}{c} [\text{Od}]^\gamma \\ \text{CR} \parallel \\ [\text{Id}, -b]^\delta \\ \text{GR} \parallel \\ [\text{Id}, +b]^\beta \\ \text{PR} \parallel \\ \text{Od} \end{array} \\ \text{Sit BE}([\text{ANT}], [\text{Property } \text{Od}]); [\text{Time } \text{Od}] & & \end{array} \end{array}$$

なお、GRは非連続 [-DEN] の実体には適用できないと考えられる。なぜなら、[-DEN] の実体とは、限界点のみによって成立している実体であり、これにGRを適用して限界点を捨象すると、無になってしまうからである。このことから、(21)「光る」や(19b)「たたく」のような [-DEN] の事象においては、テイルの適用に際して解釈規則として導入されるのは、GRではなくPLのみである、すなわち「進行」ではなく「反復」解釈になるということが説明される。

テイルの反復解釈について

以上のように、対象の変化を含む他動詞（使役事象）のテイルの文においては、一次的にはテイルは解釈されず、解釈規則によって一つの非有界化関数が導入された上でテイル（CR）が適用されるのであるが、その導入された非有界化関数の違いによって、「反復」（PLが導入された場合）、または「進行」（GRが導入された場合）の解釈が得られるものと考えられる。

ところで、対象の変化を含む事象の場合、「単一期間反復」と解釈されるには、その対象を表す名詞句の複数解釈が可能であることが条件となる。例えば「田中さんがありを殺している」を「反復」と解釈できるのは、「あり」という名詞句が複数解釈が可能であるからであり、仮に「あり」を特定の単体を表す「吉田さん」に入れ替えた文（「田中さんが吉田さんを殺している」）は「反復」の解釈はできない。¹⁰これは、対象の変化を含む文の場合、変化を起こした対象に、再び同じ変化をさせることはできないため、複数の対象の存在が前提となるからである。この制約は、不可逆な変化のみでなく、(28a, b, c)のように、可逆性のある変化が起こる場合でも、同一の対象が何度も同じ変化を被ることを表す「単一期間反復」の解釈はできない。

- (28) a. 窓がパタパタと開いている(複数の「窓」の解釈は可)
 b. 太郎が窓をパタパタと開けている(複数の「窓」の解釈は可)
 c. 起き上がりこぼしが、ぴよんぴよんと起き上がっている
 (複数の「起き上がりこぼし」の解釈は可)

それぞれの下線部は「反復」の解釈を強制する要素であるが、これらがあっても同一対象の「反復」の解釈はほぼ不可能であり、この意味を表すには、「開閉している」「開けたり閉めたりしている」「起き上がったり倒れたりしている」のように、両方向の変化を表す表現を用いる必要がある。

以上、第4節では「単一期間反復」の解釈を分析した。テイルで「単一期間反復」と解釈されるのは、「進行」も「結果」も表さない事象、すなわち事象開始時点から事象が成立していない事象、および主体が変化を被らない事象である。「単一期間反復」は、概念構造上では「解釈規則」によってPL（複数）が導入されて事象が非有界化され、CR（テイル）が適用されている構造として

表される。

5. 「複数期間反復」の概念構造

本節では、「複数期間反復」の解釈について考察する。(5)で見たように、「複数期間反復」は、「毎日」「よく」などの複数期間を明示する成分があれば、基本的にはどのような文でもこの解釈が可能であり、一方、これらが無い場合は、基本的に「進行」や「結果」または「単一期間反復」の解釈が優先される。これは、「単一期間反復」ではPLは解釈規則によって導入されるのに対し、「複数期間反復」では、PLは「毎日」などの語彙的成分によってのみ導入されることを示している。概念構造は省略するが、(3b)「松本さんは毎日庭を掃除している」や(3c)「(路上の食物を食べて)、よくペットが死んでいる」などの有界的事象は、一回の事象を表す概念構造に、「毎日」「よく」などの語彙的成分によってPLが導入され、さらにテイルによってCRが適用される概念構造になる。「複数期間反復」は、事象のタイプに関らず、基本的にどのようなタイプの文にも適用されるが、ここで問題になるのは、PLは概念構造上 [+b] の実体にしか適用され得ないにもかかわらず、(3a)「太郎は毎日ジョギングをしている」に表されるように、「ジョギングをする」のような非有界的事象であっても「反復」を表すという事実である。PLが有界的事象にしか適用されないということは、物体の例を考えてみると、有界物体である appleはapplesとなるが、非有界物体であるwaterは複数個の個体としては数えられず、通常はwatersとはならないことからわかる。そこで、非有界的事象が「反復」の解釈になるのは、「解釈規則」によって、有界化の働きをもつ概念構造関数COMP (composed of) が導入され、有界化が行われているものと考えられる。非有界的事象を有界化する関数COMPについては、Jackendoff (1991)は次のような例をあげている。コーヒーは、元来、物質名詞であるが、一杯のコーヒー (a cup of coffee) を a coffeeと表現することがあり、また複数杯のコーヒー (cups of coffee) を coffeesと表現することがある。これは、概念関数COMPやPLを含む次のような概念構造で表される。

テイルの反復解釈について

$$(29) \text{ a. a coffee} = \left[\begin{array}{c} +b, -i \\ \text{Mat COMP} \left(\left[\begin{array}{c} -b, -i \\ \text{Mat COFFEE} \end{array} \right] \right) \end{array} \right] \quad \text{“a portion of coffee”}$$

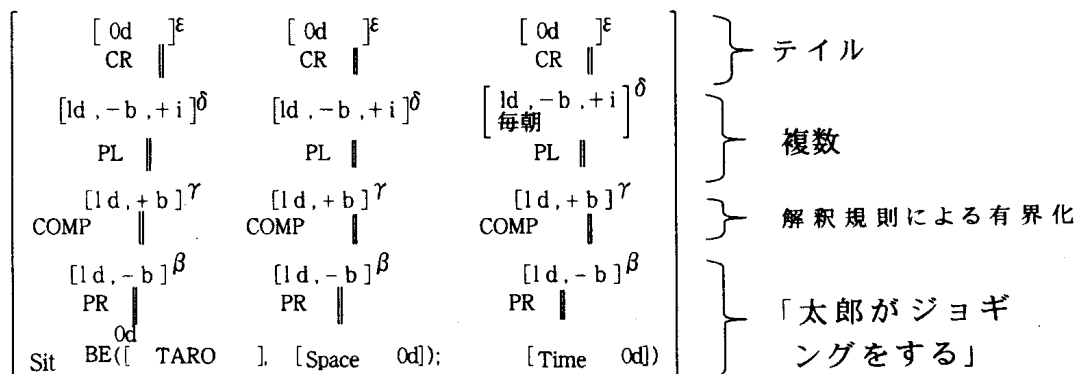
$$\text{b. coffees} = \left[\begin{array}{c} -b, +i \\ \text{Mat PL} \left(\left[\begin{array}{c} +b, -i \\ \text{Mat COMP} \left(\left[\begin{array}{c} -b, -i \\ \text{Mat COFFEE} \end{array} \right] \right) \end{array} \right] \right) \end{array} \right] \quad \text{“portions of coffee”}$$

(Jackendoff 1991:25)

コーヒーは、元来 [-b, -i] の素性を持つが、(29a)では、これに有界化関数であるCOMPを適用することによって、[+b, -i] となり、一つの有界化されたコーヒー (“a portion of coffee”) を表している。(29b)は(29a)に PLが適用された、複数の “portions of coffee” を表している。

以上が有界化関数COMPの概要であるが、話をテイルに戻すと、テイルの「複数期間反復」においては、個々の事象が「ジョギングをする」などの非有界的な事象である場合は、事象が [+b] 素性を持たないと「毎日」などの成分によって表されるPLを適用できないので、解釈規則によってまずCOMPが導入されて事象を有界化し、それからPLが適用されて「複数」の解釈となるものと考えられる。「太郎は毎朝ジョギングをしている」の概念構造は次のようになる。「太郎はジョギングをする」は、動作を表しており(17)の「太郎が働く」と同じ構造となる。

(30) 太郎は毎朝ジョギングをしている。



非有界的な事象の「複数期間反復」が、このようにCOMPによって一度有界化

言語科学研究第9号（2003年）

されているということは、「ジョギングをする」のように非有界的事象であっても、「毎日～テイル」などの形になると、事象が休止せずに続いているということではなく、一度休止して、再開することが繰り返されるという解釈になることも傍証となる。

以上見てきたように、「複数期間反復」の概念構造は、基本的には「単一期間反復」と同様に、PLが適用された上でテイルのCRが適用される。ただし、「単一期間反復」と異なる点は、「複数期間反復」では、PLは解釈規則によってではなく、語彙的成分によって導入されるという点である。これは、「複数期間反復」の解釈は、テイルの基本的解釈ではないことを示唆している。また、(3b)の「掃除している」の例に見られるように、「複数期間反復」は、「単一期間反復」と異なり、可逆的な変化を含む事象の場合、同一の対象が何度も変化を被ることを表す場合がある。(cf. (28))。例えば、(3b)は、今日掃除した庭は一度汚れるが、翌日同じ庭を再びきれいにするということを表している。(31)a,bも同様である。

- (31) a. 母は、毎日シクラメンの鉢を外に出している
b. 父は、最近6時に起きている

このような「単一期間反復」と「複数期間反復」の相違は、概念構造上においては、前者では対象のPL軸は構造保持束縛される（つまり対象は複数となる）が、後者では構造保持束縛されない（つまり対象は単数のまま）という違いとなる。

6. まとめ

テイルの概念とは、1次元を0次元に変換する関数（CR）であり、また「投射した事象のみに適用する」という制約をもつ。テイルが、事象のタイプにより「進行」「結果」「反復」などの様々な解釈をとるのは、上記の制約があることにより、Od化によって表される状態が異なるからである。テイルの解釈のうち「進行」と「結果」は、事象に直接にCRが適用されるのに対し、「反復」は複数化関数（PL）が適用されてから、CRが適用される。この点で、「反復」

テイルの反復解釈について

はテイルの二次的な解釈であるといえる。

「単一期間反復」と「複数期間反復」は、ともにPLが導入されてからテイルのCRが適用されるという点は共通しているが、「単一期間反復」の解釈の方は、(一次的な)「進行」や「結果」の解釈が不可能な場合に「解釈規則」によってPLが導入された解釈であり、変化を含む事象においては、対象の複数解釈が可能であることがこの解釈の前提となる。一方、「複数期間反復」は、「毎日」「よく」「最近」など、語彙的に複数回を表す成分によってPLが導入され、基本的にどのようなタイプの文にでも適用される。元来非有界的な事象においては「解釈規則」が導入され、有界化関数 (COMP) によって有界化された上で複数化(PL)される。

(注)

*本稿は、神田外語大学大学院に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものである。修士論文作成にあたっては、主査の岩本遠億先生、副査の長谷川信子先生、浜之上幸先生に、また本稿作成に関しては岩本遠億先生および査読の先生方に重要なコメントを数多くいただいた。心より謝意を表す。

1. 「太郎は朝日新聞を読んでいる」など、習慣が主体の属性を強く表している表現においては、「毎日」などの成分を伴わなくても「複数期間反復」解釈が優勢となる場合がある。
2. 「二階に二人の女性が働く」とは言えないが、「二階に二人の女性が働いている」と言えることなど。詳しくは、岩本(2001)を参照されたい。
3. 日本語だけでなく、一般言語学的研究においても、多くの言語において、進行相は物の位置を表す locative expression (0次元を表す) との類似を示すことなどが指摘されている (Comrie1976など)。また、Jackendoff (1983)では、進行相は時間を止めて事象を表すスナップショットに例えられている。
4. 「瞬間」というのが、どのくらいの時間の短さを指すのか自明ではない (浜之上1991など)。また、主体の動きを表す「伸びる」「増える」などは、長時間の出来事でありうるが、テイルは「結果」を表す。以上のことなどを勘案すると、「主体動作-主体変化」という基準の方が妥当性が高いといえる。しかし、主体の動作を表す「一瞥する」「目撃する」など、テイル形で「進行」を表さない動詞もあり、動詞レベルに限って考えても、この基準も、テイルの意味解釈を完全に説明できるものではない。
5. この理論上の制約は、岩本遠億氏の指摘による。
6. 英語の進行相を表す *~ing* は、1次元を0次元に変換するという機能はテイルと共通するが、*he is dying* のように変化の前の状態を表したり、*I am coming* のように未来の事象を表すことがあり、

言語科学研究第9号（2003年）

- また、日本語のテイルのように「結果」を表すことがないなどの事実から、「投射した事象に適用する」という制約は持たないものと思われる。
7. 概念構造の中に「稠密性」(density)を表す素性[±DEN]を組み込むことに関してはIwata(1999)を参考にした。なお、非有界の実体は必然的に[+DEN]である。なぜなら、非有界の実体が[-DEN]であるとする、結局、無になってしまうからである。有界の実体には[+DEN]と[-DEN]の可能性はある。有界的[+b]で[+DEN]な事象は、「マラソンのコースを走る」など(限界点は有するが、少しでも行えば「～した」と言える事象)。
 8. 「複数のありを同時に殺す」という解釈は、議論が複雑になるのを防ぐためにここでは除いておくが、この解釈についても、ありだけにPLを適用するという方法で「進行」の解釈を表す概念構造で表すことができる。
 9. Jackendoff (1991)では、このGR関数は、英語の進行相の解釈の(一つ)であるようだとしている(Jackendoff 1991: 27)。
 10. 名詞句と事象における、有界性と複数解釈の関係については、井本(2001)に詳しい議論がある。

〔参考文献〕

- 井本亮 2001 「日本語動詞文分析における「有界性」の有効性—意味的要件としての複数性をめぐって—」
『筑波日本語研究』第6号 42-60.筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
———2002 「複合動詞『V-すぎる』の意味解釈について」『言語科学研究』第8号 71-92. 神田外語
大学大学院
- 岩本遠億 2001 「空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について」『言語科学研究』第7号 13-41. 神
田外語大学大学院
———2002 「日本語空間表現のアスペクトについて」Scientific approaches to language Vol.1, 77-
107 神田外語大学言語科学研究センター
- 上原由美子 2002 『テイル文の概念構造』修士論文 神田外語大学
- 奥田靖雄 1977 「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『宮城教育大学国語国文』8
- 影山太郎 1996 『動詞意味論—言語と認知の接点—』くろしお出版
- 金水敏 1995 「「進行態」とはなにか」『国文学 解釈と鑑賞』第60巻7号 14-20.
——— 2000 「時の表現」『日本語の文法2 時・否定ととりたて』岩波書店
- 金田一春彦 1950 「国語動詞の一分類」『言語研究』15号(金田一編1976に所収)
———(編)1976 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 工藤真由美 1982 「シテイル形式の意味記述」『人文学会雑誌』第13第4号51-88.武蔵大学
——— 1995 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』ひつじ書房
- 高橋太郎(国立国語研究所) 1985 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
- 寺村秀夫 1984 『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版
- 浜之上幸 1991 「現代朝鮮語動詞のアスペクト的クラス」『朝鮮学報』第138号 (1)-(93).
——— 1997 「現代朝鮮語における動作の複数性について」『日本語と外国語との対照研究IV 日本語

テイルの反復解釈について

- と朝鮮語（下巻）』153-172. 国立国語研究所 くろしお出版
- 森山卓郎 1984 「アスペクトの意味の決まり方について」『日本語学』第3巻第12号70-84.
- 1988 『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- Comrie, Bernard . 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge university press.
- Iwata, Seizi. 1999. Thematic parallels and non-parallels: contribution of field-specific properties. *Studia Linguistica*. 53(1), 68-101.
- Jackendoff, Ray. 1983. *Semantics and cognition*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 1987. The status of thematic relations in linguistic theory. *Linguistic Inquiry* 18, 369-411.
- 1991. Parts and boundaries. In *Lexical and conceptual semantics*, ed. Beth Levin and Steven Pinker, 9-45. Cambridge, Mass.: Blackwell.
- 1996. The proper treatment of measuring out, telicity, and perhaps even quantification in English. *Natural Language and Linguistic Theory* 14, 305-354.
- Ogihara , Toshiyuki .1998. The ambiguity of the *-te iru* form in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 7, 87-120.